

まとめ

私たちが廣松渉版の批判を行ったのは、この版のドイツ語原文テキストがマルクス、エンゲルスのオリジナル草稿を正確に再現するものになっていない、従って廣松渉版を『ドイツ・イデオロギー』の信頼できるテキストとして引用することはもはやできないという、この一点であった。この問題は、オリジナル・テキストの編集方法の問題とは別次元の問題である。

ところが小林氏と張氏が、論文において繰り返し強調していることは、複雑な改稿過程をテキスト本文の中に併記するという廣松渉版の編集方法の他の諸版と比較した場合の優秀性の弁明であった¹。そして廣松渉氏が編み出した編集方法の長所に関しては、私たちも認めている。問題は、いくら優れた編集方法を採用しても、肝心のテキスト本文がオリジナルから乖離していれば、それはテキストとしての学術的価値を失うということである。

こうした問題が生じた最大の原因は、廣松渉氏がオリジナルなテキストを参照せずに、先行する諸版を比較するだけで、テキストを編集した点に求められる。

廣松氏は、最新の新 MEGA 試作版が出ていたにもかかわらず、それには信を置かず、あえて「旧来の諸版」、事実上はアドラツキー版（1932 年）の解説に基本的に準拠して本文を再現し、それ以外の諸版がそれと異なる読みを示している場合には、脚注でそれを示すという方式を採用した。ただし新 MEGA 試作版と本文との異同に関しては、これを厳密に適用すると本文それ自体の信頼性を危うくする恐れがあるので、大幅に割り引いている。とりわけ新 MEGA 試作版の最大の成果とも言うべき「改稿プロセス一覧 Zeilenparallelerisierung」という復元法を採用した「異文一覧」はほとんど参照されていない。このような巧妙な操作によって、廣松渉版の読者には、新 MEGA 試作版と「旧来の諸版」との間にはわずかな差異しかないかのような印象が生まれることになった。

廣松渉版の問題点を検討することによって私たちが教訓とも戒めともしなければならないことは、オリジナル草稿を参照せずに行われるテキスト編集の危険性であると考え。どのように高名な学者の手になるものであっても、オリジナルを踏まえない文献考証を認

¹ この点で張一兵氏は、本音をストレートに表現している。

「廣松版の価値はテキスト構成上の一大変革にあるのであり、テキストの細かな精確さにあるのではない。」（張一兵「文献学とマルクス主義基本理論研究の科学的立場」『情況』2007 年 5 月号別冊, p.162）

「我々のうち・・・新 MEGA 試行版を読んだことのあるどの研究者も、このいわゆる『異文一覧』が科学的な文献編集方式であるとも研究者の利用に役立つやり方であるとも、感じていないのである。」（同, p.161）

以上の引用からも明らかなように、張氏が関心を寄せるのは、テキストの編集方式であり、テキストの精確な解説と再現ではない。他方、私たちがマルクス研究者として関心を寄せるのは、テキストの精確な解説である。試行版はその編集方式に関してどのような批判に曝されようと、この点で最も「科学的」であり、だからこそ「研究者の利用に役立つ」のである。

張氏が「我々は廣松哲学シリーズの一環としてこの書物を出版したのであり、日本での『ドイツ・イデオロギー』文献研究の最新の成果を出版しようとしたのではない」（同, p.162）と発言するのを聴くと、張氏と『ドイツ・イデオロギー』の学問的研究の正しい在り方についてこれ以上議論しても空しいだろうという気がする。

めないこと、この学問研究のイロハに属する基本的姿勢が、日本のマルクス研究者の間に確立していなかった。そのために私たちは、高価な代償を払わされることになったのだと考えている。

張一兵氏は、中華人民共和国におけるマルクス研究の現状と今後の緊急の課題に関して次のように述べておられる。

「我々のマルクス・レーニン主義編集・翻訳機構には十分な古典文献の一次原稿がないし、専門の文献解説の専門家も養成されていない。」（張一兵「文献学とマルクス主義基本理論研究の科学的立場」『情況』2007年5月号別冊，p.163）

「我々は・・・ただちにマルクス・レーニン主義文献の原文（電子コピー）のデータベースの立ち上げに着手し、また、原文解説の専門家を積極的に養成しなければならない。おそらくそれは、ゼロからの出発になるだろう。・・・それは二次文献を利用するいわゆる文献考証もどきであってはいらない。そうした作業は、つまるところ、原文の解説、オリジナル情報の文献考証、そして版本研究に基づく真正のものではなく、歪曲が加えられた剽窃であり不法な転用だからである。」（同,p.164 傍点は張氏）

「おそらくそれは、ゼロからの出発になるだろう」という張氏の発言には、痛切な思いがこめられている。中国のマルクス研究が張氏の提起する方向に発展して行くことを、同じアジアのマルクス研究者の一人として心から願わずにはいられない。ところで、私がここで強調したいことは、ここで張氏のいう「二次文献を利用するいわゆる文献考証もどき」は、廣松渉版にもそのまま妥当することである。どのように華麗な編集方法によって装飾されていようと、オリジナル文献の考証に基づかない「文献考証」は「文献考証もどき」にすぎないのである。少なくとも張氏には、この点での学問的な見識が認められる。

しかしもう一人の批判者である小林昌人氏には、残念ながら、この点での学問的誠実さが感じられない。

「〔オリジナルを〕『実検』することが重要な意味を持つことを筆者〔小林氏〕は否定しないが、そうしなかったことが『致命的欠陥』とは考えない。何度『実検』しようとも、問題意識がなければ目にはいらないことがいくらかでもあるという事実を、従来のドイツ語諸底本は示しているではないか。」（小林昌人『ドイツ・イデオロギー』編集問題の歪曲『情況』2007年5月号別冊，p.187 傍点は共著者による）

「何度『実検』しようとも、問題意識がなければ目にはいらないことがある」ことは、小林氏とともに認めよう。しかし小林氏の主張の核心は、オリジナルを「実検」しなくとも「問題意識」さえあれば文献考証を行うことは可能だ、という点にある。このような小林氏の主張に対しては、そうした「文献考証もどき」の「作業」を「歪曲が加えられた剽窃であり不法な転用」であると弾じた張氏の上述の主張が妥当する。

小林氏と張氏は、私たちが新 MEGA 試作版におけるテキスト解説を高く評価したことを、西洋の権威におもねる事大主義であると、きびしく批判されている。張氏はこう言われる。

「かつて、新 MEGA 編集の仕事が依然として旧ソ連・東独当局のコントロール下にあった時代には、その編集の仕方が当然にも『子党』『兄弟党』のマルクス・レーニン主義文献翻訳作業の自明の基準になっていたことを、私は認める。しかし、親父党の『王

法』はすでに歴史の遺物になったではないか。もし、現在の時点で新 MEGA 編集スタッフまたはその編集基準が、その他のマルクス主義研究者の独立性を阻むことができるというのなら、私はこれをまことに馬鹿げたことと思う。……ただ新 MEGA 編集事業の真髓をまったく理解していない少数の人間が、虎の威を借りて旗を振っているにすぎない。」(張、前掲、p.160-161)

小林氏は、さらに私たちを「日本人として恥ずかしく思う」とまで言われている。

『ヨーロッパ』を嵩に中国の研究者を侮辱する感性を、筆者は日本人として恥ずかしく思う。これではまるで“脱亜入欧”ではないか。近・現代史における日本帝国主義の所業、日本の……人民もまた侵略の恩恵にあずかってきたこと、日本の敗戦後も戦争責任・戦後責任をうやむやにしていること、等々、中国を始め広くアジアの人々に対してわれわれ日本人は“血の債務”を負っているのだということ、これを忘却することは絶対に許されない。」(小林、前掲、p.189)

岡氏、とりわけ小林氏の私たちに対する厳しい批判には、愕然として、答えるすべを失うが、重要なことは、新 MEGA 試作版に対する評価は、小林氏が言われるような「アジアの人々に対する“血の債務”」に関わるような政治的・イデオロギー的な問題ではなく、極めてザッハリヒな学問的問題であるということである。

まず第一の誤解。何度も言うように、この問題は、記述的方法(廣松渉版、渋谷正版)をとるか、論証的方法(新 MEGA 試作版、年報版)をとるかという、テキストの編集方法をめぐる問題ではない。ひとえにどのテキストが、マルクス、エンゲルスのオリジナル草稿を正確に解説、再現しているかという問題である。結論的に言えば、新 MEGA 試作版(年報版もテキストの読みに関しては新 MEGA 試作版に準拠している)は、現在までのところオリジナル草稿を最も

精確に解説したドイツ語テキストである。1990年代にアムステルダムでオリジナルを「実検」した渋谷正氏が、日本人研究者として初めてこのことを確認した。そしてまもなく全世界の読者は、新 MEGA 第1部門第5巻の付録として公刊されるデジタル版『ドイツ・イデオロギー』によって、新 MEGA 試作版の解説水準を自ら追実検することができる。

小林氏は、廣松渉版と新 MEGA 試作版とめぐる問題を、あくまでも二つの編集方法の優劣をめぐる問題にすり替えた上で、これを上記のようにイデオロギー上の問題に転移させている。

「大村氏ら……は、……本文テキストに異文を組み込んだ河出版及び渋谷版よりも、異文を本文テキストから括り出した新メガ(試行)版の方に軍配を上げているかのような筆勢である。」(小林、前掲、p.188)

「廣松氏は新メガ(試行)版を丸ごと篤信するような教条主義者ではなかった。」(小林、前掲、p.186)

新 MEGA 試作版の解説を採用するか否かは、あくまでも、マルクス・エンゲルスのオリジナル草稿の状態を参照した上での判断であり、小林氏が言うような「篤信」するか、否か、という問題ではない。しかし廣松氏の場合は、そもそもオリジナルの photocopy を持たずに編集をしたのであるから、新 MEGA 試作版に対する判断は、信仰の問題にならざるをえなかった。オリジナルを参照せずに行う文献考証の危うさは、複数の諸版が異なる解説を示している際に、そのいずれの解説を採用するか判断基準が、結局、信仰の

問題に委ねられてしまうことにある。

廣松氏は、廣松渉版の「編者緒言」において、新 MEGA 試作版について次のように述べている。

「手稿の綴字法をそのまま再現する建前になっている新メガ（試行）版は、…実際に首尾一貫しておらず、若干の箇所では建前に反して、現代綴字法で印刷してしまっているように見受けられる。…甚だ残念ではあるが、新メガ（試行）版にもとづいて、手稿での綴字法の実情を性格に復元しようと図っても、徒為に終るものと判断した所以である。」廣松渉編訳『新編輯版ドイツ・イデオロギー第1巻第1篇』河出書房新社、p.xviii-xix 1974 以下、廣松渉版と略記）

「手稿そのものを手許に有せぬわれわれとしては、旧版の諸底本の報告に頼らざるをえない次第である…。」（廣松渉版、p.xvii）

ここで「旧版」とは、リャザーノフ版、アドラツキー版、ドイツ語新版のことであるが、事実上は、本稿で詳細に検討したように、アドラツキー版のことである。廣松氏は「編者緒言」において、ドイツ語テキストの解説に当たっては、新メガ試行版の読みを採用せず、「旧版」（アドラツキー版）のそれを採用すると、宣言していたのである。

また「編者序文」では、次のように書かれている。

「われわれの版本と新メガ（試行）版との文献学的優劣は、もとより識者の厳正なる判定に俟たねばならない…。」（廣松渉版、p.ii）

廣松渉版のアイデンティティは、新メガ試行版と「文献学的優劣」を競うことができるという点にある。そして故廣松渉氏は、この判定をマルクス・エンゲルスのオリジナルを実検することができる将来の「識者の厳正なる判定」に委ねたのであった。私たちは、ここに故廣松渉氏の学問的良心を見る。この「厳正なる判定」は、廣松渉版刊行の21年後（1995年）、アムステルダムで両版をオリジナル草稿と詳細に比較考証した渋谷正によってなされた。渋谷氏は、その成果を翌年、『ドイツ・イデオロギー』の編集問題』（『経済』1996年6月号）として公表した。もし故廣松渉氏がこの時点までご存命中であったなら、廣松氏は、おそらくその文献学的優劣の判定結果を厳粛に受け止めたであろうと、私たちは確信する。

しかし小林昌人氏は、厳正な事実を謙虚に受け止めることをしなかった。小林氏は、廣松渉版とは全く異なる岩波文庫版『ドイツ・イデオロギー』を、廣松渉編訳・小林昌人補訳『新編輯版ドイツ・イデオロギー』（岩波書店 2002 以下、岩波文庫版と略記）として編集・刊行したのであった。小林氏は、岩波文庫版の編集について次のように『情況』前掲論文において書かれている。

「河出版の原文テキスト篇が文庫版の「翻訳底本」だとは〔岩波文庫版の「解説」では〕どこにも書いていない。『解説』冒頭では「本訳書は」マルクスとエンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』を「独自に編集して訳出したものである」（文庫、二七五頁）と記してある。」（小林、前掲、p.180）

「文庫版では抹消・追補等の手稿の状態について、廣松版を含む従来の刊行テキストに加えて山中氏の私家版による情報、渋谷版による新たな情報、そして校了前に利用できたフォトコピー…の情報を、適宜取捨選択している。」（小林、前掲、p.202）

新メガ試行版と「文献学的優劣」を競うことができることが、廣松渉版の歴史的アイデ

ンティティであった。岩波文庫版が、いやしくも廣松渉編訳『新編輯版ドイツ・イデオロギー』と銘打っているからには、この岩波文庫版をテキストとしても新メガ試行版との「文献学的優劣」を競うことができなければならない。廣松渉版の読者は、それを「厳正に判定」した結果を知らされる権利がある。

小林氏は、岩波文庫版の「解説」で「河出版の原文テキスト篇は、現在でも国際的水準のトップにある」（岩波文庫版、p.314）と書かれている。

素直な読者は、これを読めば、「厳正なる判定」の結果、新メガ試行版に対する廣松渉版の文献学的優秀さが証明されたと理解する。しかし岩波文庫版の実際のテキストの編集に当たって、小林氏は、廣松渉版をアドラツキー版、リャザーノフ版など「従来の刊行テキスト」のうちの一つに格下げしており、小林氏にとって廣松渉版は数ある情報源の一つでしかない。

岩波文庫版では、廣松渉版と異なる新メガ試行版の解説が数え切れないほど採用されており、岩波文庫版の読者は、これをテキストとして新メガ試行版との「文献学的優劣」を自ら検証する可能性を奪われている。

さらに岩波文庫版の「序論の第一草案」と題されている節の最初の二ページ（20,21 ページ）の詳細な考証の結果（I-3）、廣松渉版と異なる読みを採用している箇所は、すべて渋谷正版と同一の読みであることが判明した。新メガ試行版が記載しておらず、渋谷正版だけが行っている指摘が、岩波文庫版で採用されている。今回は、二ページだけの考証であったが、今後、岩波文庫版の前ページに渡って詳細な考証を行う予定である。もし今回の考証によって明らかになった事実（岩波文庫版が廣松渉版と違う読みを採用している箇所は渋谷版のそれと一致する）は、文庫全編に及んでいることが検証された時、小林氏の以下の発言は通用するであろうか。

「確かに、文庫版は渋谷版をも利用している。公刊された文献を学問的に利用することがどうして『借用』となるのか、まして編訳者名と書名を挙げて謝辞を呈しているものがどうして『無断借用』ということになるのか、理解に苦しむところである。なるほど、文庫版では、“この箇所は渋谷版による”といった注記を逐一付けてはいない。…コンパクトたるべき文庫でそのたぐいの注記をつけることは割愛し、『解説』で謝意を表することをもって次善としたのであった。」（小林、前掲、p.175 傍点は小林氏）

しかし岩波文庫版の「解説」で小林氏は、自分は補訳者としての役目に徹し、編集者でなければできない作業は行わなかったと述べている。ましてや、廣松渉版のテキストに数百箇所へ渡る変更を加えたとは一言も述べていない。廣松渉版も参照資料の一つとしてテキストを小林氏自身の判断で「適宜取捨選択」したことは、読者は、今回の『情況』論文で初めて知らされたことである。廣松渉版のドイツ語テキストが基本的にそのまま底本として採用されているかのように書かれた「解説」の中で、小林氏が、たとえ「渋谷正氏の編訳になる『草稿完全復元版 ドイツ・イデオロギー』…には、…大いに助けられた」（岩波文庫版、p.314-315）と書かれたとしても、読者は、精々、補訳者としての作業に役立てたということ以上のことを想像することはできない。

小林氏は「公刊された文献を学問的に利用することがどうして『借用』となるのか」と言われるが、「公刊された文献」を引用符や注解で他人の文献からの引用であること、ないしそれを典拠としたことを明記せずに、著者自身の文章であるかのように掲載することを

「借用」と言うのではないのでしょうか。また「まして編訳者名と書名を挙げて謝辞を呈しているものがどうして『無断借用』ということになるのか」と言われますが、「岩波文庫版本文の決定に当たって少なからぬ箇所では渋谷版の情報を採用した」とは一言も言わないで、ただ「大いに助けられた」と書けば、あとは他人の仕事をどのように利用しても許されると、お考えになっているのでしょうか。

以上、申し上げた諸点について、小林氏は、岩波文庫版の読者に説明する必要があると、私たちは考える。